

## はじめに

本シリーズ『瀬戸内の中世』のうち、巻二である本書は、「権力支配の展開」「中世城館の様相」「寺社と宗教文化」の三部構成をとる。これらは、これまで「瀬戸内」という地域性と深く関連させることなく論じられてきたテーマであることを特徴とする。瀬戸内を対象に過去に論じられてきたテーマは、航路や流通、港町に焦点を当てたものが多く(橋本久和・市村高男編『中世西日本の流通と交通 行き交うヒトとモノ』高志書院、二〇〇四年、日本中世土器研究会編『考古学と室町・戦国期の流通 瀬戸内海とアジアを結ぶ道』高志書院、二〇一一年ほか)、巻二を構成する「流通体系の交錯」「港湾と流通」「鉄と焼き物」はその分野に新たに切り込む内容となっている。それに対して本書では、中世社会における地域権力の中核や寺社などの宗教文化を論ずるにあたり、「瀬戸内」という地域を冠したことにより、どのような特徴が導き出されるのが、全編を通じての論点となる。

地域名称としての「瀬戸内」という言葉は、戦国末期の宣教師が記した『日本教会史』に記されたのが初見である。小地域ごとに権力支配や文化を育んだ中世社会において、現代の私たちが想定する「瀬戸内海」という概念は未だ成立していない。備讃瀬戸や芸予諸島、防予諸島などの多島海域と周辺を漠然と「瀬戸内」と呼称し、その間の燧灘のような広い海域は「灘」と認識されていた(柴田昌見「瀬戸内という見立て」『瀬戸内全誌』中間報告書「間」からみる瀬戸内 瀬戸内全誌のための素描』瀬戸内全誌準備委員会、二〇二〇年)。しかし、多島海の間を縫って航路が発達し、大

小ささまざまな港町が繁栄し、海賊が跋扈する海を眼前にした地域において、その影響はさまざまな側面に及び、地域の構成要素となっていたはずである。本書で取り上げる一つ一つの論文を読み解くことによつて、瀬戸内の中世の特徴や独自性が浮かび上がり、新たな地域像が結ばれるに違いない。

では本書の構成と各論の論点を整理しておこう。

第1部は「権力支配の展開」である。守田逸人「讃岐国主要港湾地域の中世的編成について」では、讃岐国を対象に都鄙を結ぶ主要港湾の中世的編成について検討し、御所や御願寺造営を契機に王家領・摂関家領となり、造営関係者による国務下で立荘・再編が行われたことを論じる。川岡勉「中世後期の瀬戸内と守護権力―瀬戸内中部を中心として―」では、瀬戸内中部を対象に守護を中心とした権力秩序のあり方を考察し、諸国が内海によつて結びつけられる地域における諸権力の複雑な動きを論じる。中平景介「戦国末期の伊予河野氏と地域秩序―天正年間を中心として―」では、伊予の有力国衆や境目国衆と河野氏との関係に着目し、天正年間の伊予の地域秩序を描き出す。乗岡実「戦国末から豊臣期の大名居城―城地の移転と城郭の変遷―」では、瀬戸内における地域支配拠点の変遷を追い、戦国期から豊臣期へ移行する過程で圧倒的多数の大名居城が移転を伴っていることを浮き彫りにし、城郭構造の変化も伴いながら港湾掌握へと傾倒したことを明らかにする。

第2部は「中世城館の様相」である。増野晋次「周防山口の大名居館 大内氏館跡」では、大内氏の歴史と中世山口を構成する城館、寺社、まちについてまとめた上で、大内氏館跡の発掘調査成果を詳細に示し、領国の首都山口における拠点となった館の実像を具体的に描き出す。柴田亮「国人領主の館と村―美作国久田堀ノ内遺跡の中世居館を中心として―」では、山陽と山陰をつなぐ要衝である美作国の津山盆地において、長期的に集落が営まれた久田堀ノ内遺跡の居館の成立や変遷を追うことによつて、「久多庄」との関係や、日本海流通との接点、境目に位置する村の特徴までを論じる。柴田圭子「守護の居城 湯築城と城下―築城、変遷と地域への影響―」では、守護城館である湯築

城と地域との関係に注目し、築城や城下の形成が中世の道後地区と松山平野に及ぼした影響について述べる。田中謙「海賊の城 能島城―中世「海城」の実像―」では、海賊の城である能島城を中心に、城全体の構造と機能、その変遷を発掘調査成果から導き出し、「海城」とは何かという問いに対しても見解を提示する。高山剛「伊予・土佐境目の城 河後森城」では、予土境界の地である河原淵領に所在する河後森城跡の発掘調査成果から、時期を追っての変遷やその背景に迫り、戦国期から織豊期にかけての国境地帯の複雑な状況を描き出す。

第3部は「寺社と宗教文化」である。芥米一志「中世瀬戸内における寺社の形成―縁起の話型に注目して―」では、寺社縁起を読解することにより、瀬戸内の中世寺社の形成が論じられており、舟運を利用した中央大寺社からの宗教者の下向、国衙関係者など受容層との接触、そして荘園における末寺末社の形成を多くの事例から導き出す。上野進「中世・近世移行期における讃岐国観音寺の展開―宗教空間と地域社会との関わりを中心に―」では、観音寺の中世後期以降の展開、信仰世界と港町の住民の結びつきを総合的に分析し、亡者追善の場の形成過程を地域社会との関わりから見通す。松田朝由「石造物文化圏の展開と外部産石造物の流通―中世瀬戸内を対象として―」では、瀬戸内の石造物文化圏を抽出し、その内部に他地域の石造物がどのように展開したのかを概観し、中世瀬戸内の石造物文化圏の動態を論じる。

各論への評価は読者それぞれに任せるとしても、本書で論じられる内容により、瀬戸内という地域から連想される外部に開かれた印象とは異なり、小地域、あるいは検討された分野ごとに複雑で多彩な歴史が展開していることが理解される。本書が起点となり、中世の瀬戸内についての議論が深まり、より地域史の発展につながることに期待したい。

二〇二五年三月

柴田 圭子